

2008年度日本ナイル・エチオピア学会高島賞

審査結果報告

受賞対象協力活動

設楽知弘

「ゴンダール市の都市・建築史研究と都市計画マスタープラン作成」

〈参考論文など〉

SHITARA, Tomohiro. 2006. Present Condition of Historical Italian Buildings in Gondar. *Nilo-Ethiopian Studies* 10: 15-23.

SHITARA, Tomohiro. 2006. A Study of the Methods and Materials Used in the Construction of Italian Buildings in Gondar. *Journal of Asian Architecture and Building Engineering* 5(2): 1-6.

WORKNEH, Abraham & SHITARA, Tomohiro. 2006. *Report on the Structure Plan of Gondar*, Second Edition. 35p. (アブラハム・ウォルカネ, 設楽知弘「ゴンダール市都市計画マスタープラン改訂事業最終計画書」エチオピア国アムハラ州ゴンダール市, 2005年11月提出, 2005年12月議会承認, 第2版2006年11月)

SHITARA, Tomohiro. 2006. *Proposal for Buildings Height Regulation & Recommendation of Historical Landscape Area for Gondar City*. 12p. (設楽知弘「ゴンダール市建築高さ制限に関する最終提案書」エチオピア国アムハラ州ゴンダール市, 2006年9月提出)

◆選考結果

設楽知弘氏による受賞対象協力活動は、これまで見受けられた同賞受賞者の作品とは傾向が大きく異なっており、研究と協力活動の結合・融合という側面において、新しい分野を開拓したものと位置づけられる。

参考資料は、2編の学術論文、及び同数2編の報告書、合計4編の著作から構成されている。2編の学術論文のうちのひとつは当学会が刊行する論文誌*NES*に投稿され、当該の趣旨に依拠したものであるが、残るもう1編は日本建築学会によって発行がなされている査読英文雑誌*JAABE*で公にされた、高度に専門的な内容を含む建築史的観点に基づいた考察であった。

また他の2編の報告書はさらに性格を異とし、これらはエチオピアのゴンダール市議会へ向けて提出された都市計画的な視点からの長期計画を踏まえた多数の進言を含む図書であって、その提案はすでに同市議会の審議を経て承認を得ており、報告された具体的な指針がこれから

市の政策として実現を迎えようとしている。

内容がそれぞれ異なっていると言ってよいこれら4編からなる成果物が今、等しい価値を有するべきものとして、われわれの前に掲げられているわけである。

ここで目にしているのは、従来の枠組みの中に収まった狭小な研究者による単なる書き分けの文章ではない。都市計画家や建築史家を兼務するにとどまらず、保存修復家、そして実務に長けた調査官などといった重層した役割を、すべて過不足なく兼ね備えているという印象の人物像が自然に招き寄せられる。こうした職種の様態は、これまで細かく分け隔てられて情報交換を図るのが常に困難な状況にあったように思われるから、近年にあらわれ出たこの新人の目覚しい活動の姿は非常に新鮮に映る。

もちろん、ひとりが演じた相互の役割において、矛盾する点がおそらく数多く生じたであろうことは想像に難くない。歴史的に価値を有する建築遺構の地道な保存修復活動と、その建物が立っている地域の活性化をめざすという視点は、しばしば拮抗するからである。また都市計画的な観点から眺めるならば、個々の小さな建築遺構の価値とは、些細なものに過ぎないものとして扱われることが多いであろう。だが同じ著者の執筆によるこれら四つの著作では、そうした矛盾が無理なく解消されていると思える。執筆者自身によっておこなわれた、詳細で徹底した現地調査の成果が随所で生かされているからであろう。

アフリカの小さな一地域だからこのような多方面にわたる活動が単独でも可能であったという皮相な見方は、明瞭に排斥される。エチオピアのゴンダール地方が、ユネスコの世界遺産の指定をすでに受けている点は忘れるべきではなく、むしろ逆に、著者の苦勞がひと通りではなかったことがそこで偲ばれるのである。

高島賞にふさわしい労作として、設楽知弘氏による協力活動が選ばれるべきであると判断される。

以上

2008年4月17日

選考委員会

西本真一（選考委員長）

柘植洋一

真道洋子

受賞によせて

設楽知弘

このたび日本ナイル・エチオピア学会高島賞を受賞できたことをとても光栄に思っている。とりわけ高島賞においてはじめての「協力活動」に対する表彰ということに喜びもひとしおである。本稿では、受賞対象となった「ゴンダール市の都市・建築史研究と都市計画マスタープラン作成」について、活動の経緯と概要を今後の展望とともに記してみたい。

修士課程では中近東・アフリカの建築についての研究をしたいと思っていたわたしは、1998年の春、恩師である三宅理一先生の研究室(芝浦工業大学大学院)に加わった。その年の秋、エチオピア、エジプト、イエメンを訪れ、エチオピア正教の岩窟聖堂に研究対象を絞った。修士論文では、岩窟聖堂の内部空間の幅、奥行、天井高の比率に着目し、その特性を見いだすことができた。その後、建築設計の基礎を身につけるために設計事務所に就職し、集合住宅と別荘のデザインなどを担当した。自らが設計に携わった建築が、建設されるプロセスが気になり、完成まで現場には足しげく通った。実務で身につけた知識を活かして、エチオピアでふたたび研究をしたいと思い始めた頃、好機が訪れた。三宅先生(慶應義塾大学大学院)が、ゴンダール市役所、アムハラ州、アジスアベバ大学と共同で、同市の都市計画マスタープランの改訂事業を立ち上げたのだ。進学の相談をしたわたしは、市役所が改訂事業のために日本人協力者を必要としていることを先生から伺い、そこで働きながら研究をおこなうことができないものかと考えた。2002年の春、設計事務所を退社してゴンダールをはじめ訪れてみた。ソロモン朝ゴンダール期(1632-1769年)からイタリア占領期(1936-1941年)に建設された王宮建築(ファシラダス王宮群は世界文化遺産に登録されている)、宗教施設、住宅建築、コロニアル建築が豊富に残るゴンダールの町並みはとても魅力的であった。市役所が、改訂事業のプロジェクト・マネージャーとして働きながら研究を進めることを了承してくれたことで、博士課程(慶應義塾大学大学院)に進む決意がかたまった。

エチオピアにおける都市・建築分野の研究は決して活発とはいえない。先述の岩窟聖堂については、多くの研究者による調査結果が蓄積されているが、それ以外は乏しいのが現状である。ゴンダールを訪れて以来、わたしはゴンダールの都市・建築の形成とその近代化についての研究をしたいと考えていた。これまで誰も試みていないこうしたテーマの研究を成し遂げるには、都市・建築の様子を記した文献資料の収集と読解をおこなうとともに、現地都市・建築について時間をかけて観察する必要があった。博士課程の入学から半年経った2003年の春、市役所の都市計画マスタープラン改訂事務所に加わり、ゴンダールと日本を定期的に往復する生活がはじまった。そもそもマスタープランの改訂が必要となったのは、著しい人口増加による土地不足の解消と世界文化遺産のファシラダス王宮群を核として栄えた中心市街地の景観保護が理由であった。改訂事業は、4組織の担当者(約30名)が定期的にゴンダールでワークショップを開催して、成果の発表、議論、作業の分担をおこなう形で進められた。離れた場所にいる担当者が作業を円滑に進めるためには、手書きのものしかなかったゴンダールの地図を、CADを用いて電子地図化する必要があった。自身の研究にも役立つことから、それがわたしの最初の任務となった。手書きの地図をコンピュータにとりこみ、線をトレースして電子地図を描く。市役所の担当者にCADの使い方を指導しながら進めた。この任務は半年の期間を要し、エチオピアの市町村で最初の電子地図が完成した。2003年の秋、電子地図を各組織に配布したことで、改訂事業はつぎの展開をむかえた。2004年の春、改訂事業の計画責任者のアブラハム・ウォルカネ先生(アジスアベバ大学)が頻繁にゴンダールを訪れるようになり、市役所やアムハラ州の担当者とともに、ゴンダール全域の土地利用や道路ネットワークについての調査を開始した。電子地図は彼らの調査の分析や提案の図面化におおいに役立ってくれた。

電子地図の完成後、研究のために日本とアジスアベバで文献資料を収集したわたしは、ゴンダールに戻り、ソロモン朝ゴンダール期からイタリア占領期に建設された居住区と建築についての実測、写真撮影、聞き取りといった調査に注力した。17世紀から19世紀にかけてゴンダールを訪れた外国人が残した旅行記には、都市・建築、人々の暮らしについての描写が文章やスケッチで残されている。同様に、イタリア占領期のイタリア政府による報告書にも多くの情報が残されている。こうした文献資料から過去のゴンダールの都市・建築を考察する一方で、現地で居住区と建築の空間構成や構法技術、人々の暮らしなどを観察する。ゴンダールの都市・建築の形成と近代化についての解明は、2006年の夏まで続いた。

ファシラダスによって築城されたゴンダールの人口は、盛期には約6万人を擁し、19世紀中期には約6000人にまで衰退するが、イタリア占領期には1万5000人を超え、その後増加の一途をたどる。ファシラダスの息子ヨハネス1世が、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒の分離居住政策を敷いたことで、ゴンダールには宗教別に大小11もの居住区が形成され、各居住区は宗教施設を中心として互いに距離をとり散開的に発展する。しかし、こうした散開する都市構造は、イタリア占領期のエチオピア人隔離政策とイタリア人居住区の建設によって隙間を埋められる形で崩壊する。17世紀にポルトガルとの交流によって国外からもたらされた建築の空間構成や構法技術は、外国人建築家の指揮の下にゴンダールの王宮建築、宗教施設、住宅建築に用いられ、独自の建築文化を生み出す。諸公侯時代(1769-1855年)には、王宮建築や宗教施設の造営は途絶えるが、これらの建築のメンテナンスや住宅建築の建設は、ゴンダールの職人たちの手によって継続される。しかし、こうした職人はイタリア占領期にイタリア人のためのコロニアル建築の建設現場にかりだされ、イタリアからもたらされた近代的な空間構成や構法技術による建築の建設に携わることで、占領後はコロニアル建築を模倣したポスト・コロニアル建築をつくり始める。

これらの研究結果はワークショップで発表され、改訂事業に反映された。市役所の任務として、中心市街地の景観保護という観点からゴンダールの歴史的建造物のリスト化と地図作成、歴史的景観地区の候補選定に取り組んだ。その後、改訂事業の最終計画書において、歴史的景観地区とその周辺の土地利用を制限し、乱開発を防止する提案をおこなった。また、ゴンダールの建築高さ制限に関するガイドラインを作成し提出した。2006年の秋、都市計画マスタープラン改訂事業はようやく第一フェーズが完了した。現在、ゴンダールではアジスアベバ大学と市役所の担当者が中心となり、第二フェーズの地区計画が始まり、新しい市場や商業ビルの建設が進んでいる。わたしは第二フェーズには参加せず、これまでの研究成果を総括し、ようやく2008年8月に博士号を取得した。

ゴンダール市役所で働きながら研究を進めるという、たいへん貴重な経験ができたことに心から感謝するとともに、わたしの活動がゴンダールのために少しでも役に立ったならば嬉しいかぎりである。ゴンダールの都市計画マスタープランは定期的な見直し作業が必要であることから、これからもゴンダールに関わり続けていきたいと思う。また、ゴンダールで取り組んだような研究を、エチオピアの諸都市において一つ一つ積み重ねていくこと、そして、地域に貢献できるような活動をするを今後の目標として掲げたい。

最後に、学会の諸先生、三宅先生、アブラハム先生、改訂事業の各組織の担当者、エチオピア研究の仲間に、この場を借りて心から御礼申し上げます。

(したら・ともひろ/SFC研究所)